

正月特別展（12月19日～1月14日）

『万葉かるた・万葉屏風展』

【回廊1】 常設展示室「家持劇場」まで

① 「梅の花」（屏風）

平成15年度春の特別企画展「近藤芳竹 万葉の心を書く」に出展した作品です。書かれています歌は、大^{おお}伴^{とも}家^の持^{もち}の父^{ちち}旅^{りょ}人^{にん}が大^{だい}宰^{さい}府^ふ（いまの福岡県）で詠^よんだ「わが園^のに梅^の花^は散^ちるひさかたの天^{あめ}より雪^{ゆき}の流れ^な来^きるかも」（巻五・822）です。

② 「新^{あらた}しき年^{とし}の初^{はじ}めの初^{はつ}春^{はる}の今日^{けふ}降^ふる雪^{ゆき}のいやしけ吉^よ事^{ごと}」（屏風）

天^{てん}平^{びょう}宝^{ほう}字^じ3年（759）正月1日に因^{いな}幡^ば国^{くに}の国^{くに}庁^{ちやう}で詠^よまれた、『万葉集』の最後^{しゆうご}を飾^{かざ}るの^の大^{だい}伴^{ばん}家^け持^{もち}歌^かです。新^{あらた}しい年^{とし}の初^{はじ}めの今日^{けふ}降^ふる雪^{ゆき}のよう^{よう}に、良^よいこ^{こと}が今^{いま}年^{ねん}もた^たく^くさ^{さん}あ^あり^りま^ます^すよ^よう^うに…この思^{おも}い^いを込^こめて年^{ねん}賀^が状^{じやう}に書^かき記^きす人^{ひと}も多^{おほ}い^いで^でし^しょう^う。な^なお、この屏^{びん}風^{ふう}は、万^ま葉^{えつ}歌^かを中^{ちゆう}心^{しん}に多^{おほ}く^くの作^{さく}品^{ひん}を^を残^{のこ}す女^め流^{りゆう}書^{しよ}家^か柳^{やなぎ}沼^{ぬま}貫^{かん}洞^{どう}女^{によ}の^の手^てに^にな^なる^るも^もの^ので^です。

③ 『万葉かるた』2種

I・萬葉百首絵かるた

昭和改元を記念して昭和3年に主婦の友社が企画したものです。万葉の名歌を読者投票で選^{えら}び^びま^ました。歌^{うた}は歌^{うた}人^{ひと}とし^{して}も有^お名^なな^な尾^{おの}上^{えさ}柴^{しゆう}舟^{ふね}の書^{かき}に^にな^なり、絵^えは当^た時^じの代^{だい}表^{ひょう}的^{てき}画^が家^か、安^{やす}田^た鞆^{もろ}彦^{ひこ}・前^{まへ}田^た青^{せい}邨^{そん}・野^の田^た九^く浦^ほ・小^こ林^の古^こ径^{けい}・平^{ひら}福^{ふく}百^{ひやく}穂^{すい}の5人^{ごにん}によ^よつて描^かけ^てい^いま^ます。

II・犬養孝万葉かるた

当館の名誉館長だった犬養孝氏は、昭和24年当時流通していたタバコの箱の裏側を利用して、みずから筆書きされた「万葉かるた」を作成しました。展示品は、犬養氏の手元に残っていた原本をもとに平成5年に復刻されたものです。

④ 『三十六歌仙双六』と『新板百人一首むべ山双六』

いずれも江戸時代の終わりごろにつくられた「すごろく」です。それぞれコマを進めて遊^{あそ}び^びながら、歌^{うた}を味^{あじ}わ^わうこ^{こと}が^がで^でき^きるよ^よう^うに^にな^なっ^つて^てい^いま^ます。『三十六歌仙』の絵^えは歌^{うた}川^{がわ}芳^{よし}虎^{とら}、『百人一首』の絵^えは歌^{うた}川^{がわ}豊^{とよ}国^{くに}とい^いう浮^う世^よ絵^え師^しが描^かいて^いま^ます。な^なお『百人一首』のほうは、『東^{とう}海^{かい}道^{だう}中^{ちゆう}膝^{ひざ}栗^り毛^げ』で有^あ名^なな^な十^{じゅう}返^{へん}舎^{しゃ}一^{いち}九^くが校^{こう}訂^{てい}を^をお^おこ^こな^なつ^つた^たとい^いう特^{とく}徴^{てい}が^があ^あり^りま^ます。

⑤ 『百人一首画』

江戸時代後期の浮世絵師勝川春章の描いた『錦百人一首東^{あずま}織^{おり}』に酷似していますが、絵師や制作年代などまったく不明です。

⑥『万葉かるた』 2種

I・万葉かるた

平成10年、作詞家^{みねよう}峯陽氏が万葉集から選歌してあらたに作詞した詩集『現代訳^{いま}「萬葉集」』から50首を選び、万葉画家である鈴木靖^{やすまさ}将氏が、それぞれの万葉歌のイメージを絵に描いて作成されたかるたです。なお、監修は小野寛館長です。

II・万葉歌留多

奈良県立万葉文化館の展示部門である万葉ミュージアムには、日本を代表する日本画家によって描かれた万葉画が154点収蔵されています。このかるたは、その日本画のなかから50点を選び作成されたものです。

【回廊2】 常設展示室「家持劇場」から企画展示室まで

⑦越中万葉かるた

楽しいかるた遊びを通して『万葉集』の名歌に親しみ、あわせて郷土の良さを理解しようという意図のもと、昭和55年に高岡市教育委員会が中心となって、中西進氏監修によって作られました。

⑧越中万葉かるた屏風

昭和55年の「国際児童年」の記念事業として、かるたを通して子どもたちが郷土の歴史を学び、郷土への愛着心をはぐくむという趣旨で、高岡古城ライオンズクラブと高岡市教育委員会は、「越中万葉かるた」を制作しました。以来、毎年1月に市内の小・中学生が参加して「越中万葉かるた大会」が盛大に開催されています。この屏風は、「越中万葉かるた」制作のために日本画家である^{むらんぼ}村閑歩が描いた100枚の原画に、のちに書家である^{ほうちく}近藤芳竹氏が万葉歌を書き、六曲の屏風に仕立てたものです。

⑨「渋溪の崎から望む立山」（版画・屏風）

平成15年度秋の特別企画展「佐竹清 越中万葉を彫る」開催にあたり、佐竹氏から寄贈された作品です。

⑩「越路讃歌」（屏風）

平成15年度春の特別企画展「近藤芳竹 万葉の心を書く」開催にあたり、近藤氏から寄贈された作品です。書かれている4首は、いずれも越中万葉のなかの名歌です。

【回廊2】 企画展示室から屋上庭園への階段まで

⑪「万葉歌を描いた屏風」（7点）

越中万葉にうたわれた世界を日本画で描きつづけられた谷口謹一(号紅雲 故人)の作品です。